

特116

702

融  
 玉  
 葛  
 揚  
 貴  
 妃  
 寔  
 威  
 白  
 樂  
 天

田



始



白不家  
觀十世  
心之印

43  
702

白樂天 概説

内四卷ノ一

唐土の詩人白樂天、其國王の命を受けて日本の智慧を計らん為め筑紫の海に來り、暫く四邊の風物を眺めたる處に、漁翁ありて小船を浮べ人待顔なり。樂天先づ言葉をかけて日本の人かと問へば、漁翁は御身は白樂天ならんと言ひ、打驚ける樂天と種々の問答をなせし末、漁翁は唐の詩賦と大和歌とを比較し、大和歌は自然の聲調に基くものなることを説明し、今試に其和歌を詠じて舞樂を為し示さんとて姿を隠しぬや、ありて漁翁は任吉明神となりて現化、我が力の有らん限りは日本の國を窺はせし疾く歸り給へ樂天と宣はりて舞樂を奏せば、他の神々も立ち現化、共に興する小忌の衣の袖より起る神風に、樂天の船は唐土に吹戻されけり。

大正  
10. 7. 25  
内交

此曲確リト定ミナク謠フベシ  
小書 波夜陀麻傳 長序

役別	ワキ 白樂天	ツレ 男	後シテ 住吉明神
装束	唐冠 赤金入鉢巻 着附厚板 袷袴衣 白大口 紋付腰帶 扇(又唐團扇ヲモ)	着附無地駢斗目 緋淺黃水衣 紋付腰帶 扇 釣棹	面笑尉(朝倉尉モ) 尉髮 着附無地駢斗目(又小格子厚板) 茶水衣(肩立) 緞子腰帶 尉扇 釣棹 面皴尉 初冠 纓白垂 白鉢巻 着附小格子 袷袴衣 色大口 緋紋腰帶 神扇
季	不	定	能 脇 曲 (物袷神) 目 春 初
所	上海紫筑州九	級	二

白樂天

世阿彌元清作

早白樂天上 極細カニシツカイト  
半開  
ツヨク  
木ニ合ハズ

白樂天とは神が事なり。さても  
これより東は當つて西あり。名  
と日本と名づく。あき彼のよ  
渡り。日本の智慧と計れらの宣  
旨は任せ。只今海路より都まで  
打切

ツキ  
次持上  
拍子合

船漕ぎ出でて日の本の船漕ぎ  
出でて日の本の其方の國と尋  
ねん通行上東海の波路遙かよ行  
く船の波路遙かよ行く船の跡  
よ入りの日の影残る雲の旗手の天  
律空月また出づる其方より  
山見えそめて程もあく日本

ツキ  
真一  
拍子合ハス

の地もよきまにけり日本の地にも  
よきまにけり海路を経て急ぎ  
作程よこれのちや日本の地よよ  
きてる暫く此の處に碇をおろし  
日本のやうと眺めどやとあし作  
不知火の飛雲の海の朝ほらけ  
月のみ残る景色かあ巨水

日本

二

優々として碧浪天を侵し越  
 を辞せし一范蠡が扁舟は棹と  
 移すある立湖の煙の波の上か  
 くやと思ひ知られたりあら面白  
 の海上やあ松浦は西よ山あ  
 ま有明の月月の入る雲も浮  
 ふや沖つ舟雲も浮ふや沖つ舟

○小菘

互にかつる朝またき海はそなた  
 か唐土の船路の旅もをからで  
 夜泊と聞くからよ月も程あま  
 名跡のあ月も程あま名跡のあ  
 われ萬里の波濤を凌ぎ日本  
 の地よもよきあこれよ小船一艘  
 浮つる見れば漁翁なり如やにあ

早門 確カリ

早門

早門

れなるは日本の者か シテ 其の御身は  
 唐の白樂天とてすまますあ  
 不思議やお給めて此の世に渡り  
 たると。白樂天と見え事は行の  
 故とてあるやらん ツレサ 其の身の漢  
 出の人もあれども。名の先立つて日  
 唐の白樂天とてすまますあ  
 不思議やお給めて此の世に渡り  
 たると。白樂天と見え事は行の  
 故とてあるやらん ツレサ 其の身の漢  
 出の人もあれども。名の先立つて日

本に聞ゆ隠れおけられやすあり  
 だらひ其の名は聞ゆるともそれ  
 ぞとやわけて見え知る事あるべき事  
 とも思われず シテ 日本ホの智慧と  
 計らんとも樂天あり給みべき  
 とのびえの音まの日の本よ。西と  
 眺めて仲の方より。松たに見のれ

○小謡

人毎よ。まわ。わ。う。れ。ぞ。と。心。づ。く。し。  
甲 上三句同 今や。今や。今や。と。松。浦。舟。今。や。  
拍子三 今や。と。松。浦。舟。仲。より。え。え。て。隠。  
 れ。あ。ま。き。唐。土。松。の。唐。人。と。樂。天。と。見。  
 る。事。の。何。か。空。目。な。る。べ。ま。む。つ。か。  
 し。や。言。さ。わ。く。唐。人。あ。れ。ば。言。祭。  
 を。も。そ。も。あ。ま。き。も。あ。ら。ば。こ。そ。あ。

ら。よ。い。釣。竿。の。い。と。ま。惜。し。や。釣。  
 垂。ね。ん。眼。惜。し。や。釣。垂。ね。ん。

早河 流ヲカヘ  
 あ。は。な。あ。は。素。ぬ。へ。ま。事。あ。り。毎。と。迎。

付。け。の。入。ぬ。り。は。漁。翁。が。さ。そ。の。頃。  
 日。本。よ。の。何。事。と。驚。ぶ。ぞ。 シテ 関カニ 今。そ。唐。  
 去。よ。は。何。事。と。驚。び。給。ひ。作。ぞ。

ワキ サフリ  
 唐。よ。は。詩。と。作。り。て。遊。ぶ。よ。



シテ神ノイ  
 日本子な歌を詠みて人の心と慰  
 めゆ ワキカフテ 我も歌とはいかよ シテ困ガシ 我れ  
 天竺の文を唐土の詩賦とす。  
 唐土の詩賦を以て我が朝の歌  
 とす。されば三國を我らげ舞を  
 以て。大まよ我らぐと書いて大和  
 歌と讀めり。 カシタロフ 知らるるされて心ぞ

也。翁 ウヂ 心とほ慰せんため作あ  
 け ワキカフテ 其の儀 ノリ ありて 先ヲ登ル いてさらば目  
 前の景色を詩と作つて聞か  
 せり。 神ハメニ 青苔衣とわびて巖の肩  
 又怒り。白雲帯は解て山の腰  
 とめぐる。 カフテ 心得たるか漁翁  
 青苔 シテ といは青まの苔の巖の肩

又かされるが衣ココロに似たるさかやハク白雲クワン  
 帯オビは似て山の腰とめぐるキヲ替ハ面白し中柳テ  
 面白し日本ホノの歌もたれいよ柏子合苦コケ  
 衣コウきたるサト巖イハのさも和ヲなネくテ衣コウきたるサト  
 ぬニト山の帯オビとする和スかおカウ不フ思シ儀ギやヤ  
 お具オモの身ミは賤セくク漁翁イサノウなるナが  
 かく心ココロあるアル詠エイ歌カと連ツぬル其ソノの身ミ

ぬニト中ナカなるナル人ヒトやらんミテヨウウケテ人ヒトがまマわ  
 お名ナもなナまマの者モノありアリさサれレもモ歌カ  
 と詠エイむム事コトは人ヒト向ムカのノ又マタにニ限リ人ヒトか  
 らずラズ生ナまマしシまマけケるル物モノ毎ヘもモ歌カ  
 と詠エイまマぬヌあアまマ物モノとトそソもモわワ生ナ  
 まマけケるル物モノとトはハさサてテはハ名ナ歌カ  
 畜クたタまマでデもモ和ニテ歌カとト詠エイずズるル

○曲獨吟  
○切迄雜子

其の例 和國よ於て 證歎多  
一 爲らよ啼く鶯も水もすめる  
蛙まで 唐土の知らず日本よは  
歎と歎みぬぞ翁も大和歎とむ  
かたの如く詠むあり  
鶯の歎と詠みたるは歎とむ  
鑑天皇の御宇かよ大和の國

高天の寺よ住む人のちまねん  
の春の頃 狩場の梅よ鶯の来  
りて啼く聲とゆけむ 初陽毎  
朝来不遭還本栖と啼く文字  
よ写してこれと見れば三十一文  
字の詠歎の言葉ありけり  
初春のあたる毎よの来れどもあ

尺牘山

もてぞ歸る。もとの栖みし聞え  
つる鳥の聲を初として。その  
外多し畜類の人もたぐへて歌  
を詠む例は多くあり。う海の  
濱の美砂の粒々よ。生まるる生  
ける物何れも歌を詠むあり。う  
げにや和國の風俗の。げにや和國  
ロギ上

の風俗の。心ありける。蠻人のげに  
有難き習わぬ。もて和國の  
歌。和歌を詠して。舞歌の曲。そ  
の色々を顯さん。地。上。朗。唱。そ。も。や。舞  
樂の遊。其の役々の報あらん  
誰あくても。は。舞。あ。れ。だ  
よ。あ。ら。ば。此。の。舞。樂。の。鼓。は。彼

の音笛の龍の吹らす声舞人の  
けの射り若の彼のよま立つて青海  
ま浮ひつ海青楽と舞ふべしや  
葦原の國も動かど萬代まで  
山影のうつるか氷のまき海の  
彼の鼓の海青楽  
西の海憶り原の彼向より現  
シテワカ朗カニ  
地 洞カニ  
後シテ住吉神上 朗カニ洞カニ  
出端  
シテ上 洞カニ  
拍子合  
太鼓コイ合  
中東序間  
上地  
ホル  
お上頭目

れおでし住吉の神位住吉の神位  
吉の現れおでし住吉の  
住吉の神の方のあらん程はよ  
も日本をとへ後へさせ給へし速り  
ま浦のは立ち歸り給へ楽天  
住吉現し給へし住吉現し給へは  
伊勢石清水賀茂春日鹿嶋三  
○独吟  
○仕舞  
上帯同  
明カニ花ヤカラヌ様

海詠訪執田母藝の巖島の明  
非は妙女竭羅龍王の骨三の姫  
宮にて海の上に浮んで海青樂  
と舞ひ給へども令大龍王反ハリ  
んの曲と奏し空海も翔りつ  
舞ひ遊子小忌衣の羊凡非風も  
吹き戻されて唐船はまてより

○祝言の謠

僕もよ歸りけり。げは者強や。  
非と君げに有強や。非と君  
代の動かぬ國ぞ久しき。動  
ぬ國ぞ久しき。

遊行上人廻國の途次加賀國篠原にて説法しける處に、餘人には見えざ  
 る老翁一人毎日來りて聽聞せるにぞ、上人訝りて其名を問へば、初めは  
 恥として答へざりしが、一つは懺悔の爲めなればと促されて、遂に齋藤  
 別當實盛の幽靈なる由を明し、二百餘歳の程は經れども、執心此地に  
 残りて浮びもやらずと語り、傍なる池のほとりに行くと見えて姿は消えぬ。  
 仍て上人實盛の跡を弔ひるけるに、前の老翁は甲冑を帶りて現れ、上  
 人の回向を喜び、念佛往生の教を尋ねなどして後、其昔篠原の合戦に  
 鬚鬚を添めて出陣せしも、思はぬ敵に首かゝれし事など語り、或は  
 横して見せ、猶尚跡を頼みて失せけり。

### 實盛

概説

内四卷ノ二

遊行上人廻國の途次加賀國篠原にて説法しける處に、餘人には見えざ  
 る老翁一人毎日來りて聽聞せるにぞ、上人訝りて其名を問へば、初めは  
 恥として答へざりしが、一つは懺悔の爲めなればと促されて、遂に齋藤  
 別當實盛の幽靈なる由を明し、二百餘歳の程は經れども、執心此地に  
 残りて浮びもやらずと語り、傍なる池のほとりに行くと見えて姿は消えぬ。  
 仍て上人實盛の跡を弔ひるけるに、前の老翁は甲冑を帶りて現れ、上  
 人の回向を喜び、念佛往生の教を尋ねなどして後、其昔篠原の合戦に  
 鬚鬚を添めて出陣せしも、思はぬ敵に首かゝれし事など語り、或は  
 横して見せ、猶尚跡を頼みて失せけり。

此曲ニ番目物ノ内ニテ性立キタルモノナリシテワキモ心持少ナカラズ弱年ニテハ勤メ難シ  
小畜 長胡床

役別	ワキ僧	ワキ僧 從僧二人	前シテ老翁	後シテ 齋藤實成
装束	角帽子 着附小格子 水衣 白大口 腰帶 扇 珠數	角帽子 無地製斗目 水衣 白大口 腰帶 扇 珠數	面朝倉(笑尉三) 耐製 着附製斗目(又小格子) 茶紐水衣 殿子腰帶 珠數	面朝倉(笑尉三) 梨子打鳥帽子 白堂 白鉢巻 着附無色厚板 法被 半切 太刀 竹羅扇
季	十一月	曲柄	二番目(物羅修)	
所	加賀國江沼郡藤原村	古唄	一	級

實盛

世阿彌元清作

早僧サシ上 位ヲ下リ確カラ  
拍子合ハズ ヨクク 狂言口開

それ西方の十萬億土遠く生るる  
道あからるも己心の弥陀の國  
貴賤群集の称名の聲  
目々夜々の法の場  
げにも誠

又接ぎ不捨の誓に報か

又接ぎ不捨の誓に報か  
獨りあはれ佛の心名を

實盛



素ね見ん。佛の岸みと素ね見ん。  
れのおの歸る法の場。知るも知  
らぬも心ひく誓の綱は漏るべきや  
知る人も知らぬ人も渡さばや  
彼の國へ行く法の船。浮ぶも安き。  
道とわかや。浮ぶも安き。道とわか  
望款遠かよ。聞ゆ。孤雲の上。野を  
シテ老翁上。開カニモシ。御子合天。ツヨク

来速す。落日の前。あら尊とわ  
今日もまた。紫雲の立ちて。ゆる  
や。鐘の音。念佛の聲の。聞えい。  
さては。聽聞も。今あるべし。さあ  
まだよ。立ち居。吾も。き。若の。彼の。  
寧らりも。つ。かす。法の。場。よ。より。う  
あ。が。ら。も。や。能。聞。せ。ん。一。念。稱。名。の。

聲コエのコトもハらハらハよクのハ接ツク取ツクのハ老コノ明ミヤ曇トモ  
らハ收ツクもハ老コノ眼メのハ通ツク路チあハ後ノチ以テ  
のハあハらハずハよクしハがハ少クはハ遅オソク  
くハもハとハ去クるハ事コトをハかハるハまハじハや  
南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 ハめハすハはハ翁オウさハて  
もハ毎マ日ニのハ祿ロク名ナよク怠オシるハ事コトあハりハ。  
されハばハ志シのハ者モノとハ見ミるハ所トコロよクたハとハ

のハ姿シ餘ヨリ人ニのハこトらハ事コトあハ。誰タレよハ向ムカ  
つツてハ行ユク事コトとハすハそハとハ皆みな人ニ不レ  
審シあハりハ。今イマ日ニあハりハのハ名ナとハ  
名ナ告ツクりハゆハへハこトれハのハ思オモひハもハよクらハぬハ作ス  
かハあハ。固カタよクりハ所トコロのハ天アマさハのハ鄙ヒト人ニあハ  
れハばハ人ニがハまハりハやハあハらハもハあハらハせハてハそハ  
名ナ告ツクりハもハせハめハたハるハよク人ニのハ御ミ下ゲ向ムカ偏ヒト

三

三

よみ院の来迎あれべかりこうぞ  
長生して此の称名の時節は逢  
ふ事。盲亀の浮木優曇華の  
花待ち得たる心地して考の幸  
牙子辨え悦の海狭し餘るさ  
れば汝の牙あから安樂國に生  
るかに無比の歡喜とあす所は

輪廻妄執の圖像の名をと又更め  
て名告らし事。口惜しうこそい  
とよげにげに翁の申す所を  
さわりの至極せりさりのあからつ  
は懺悔の口心ともあるべし。た  
あこしが名をと名告りゆへ  
名告らでの叶ひひまじまが

ワキサラリメ

あかみかの事急いで名告りゆへ

シテ明カニ

さらば御前ある人とのけられ

ゆへにさうしまりて名告りゆへ

ワキサラリメ

固より翁の姿餘人の見る事ハ

あけれども可なりあらん事ハ

くべ。近う寄りて名告りゆへ

シテ閑カニ

昔長井の齊藤別當実盛は。

此の篠原の合戦に討たれぬ聞

しるし及びてこそゆらめ

ワキサラリメ

引れの平家の侍ら取つてのあ

将。その軍物語の益。たぐれこと

の名をと名告りゆへにやされば

シテ先ラカケ

そ其のるゑ盛は。此の御前ある地

水。そて鬚鬚とも洗われとあ

り。されど其の執心跡りけるが今も

心持シ

御カニスラリト

このあたりりの人よは幻の如くん由

ると申しゆ ワキカケテ こそ今も人よんえ

候か シテ中部ヘ 深山木の其の梢とは見

えざり チラ 梅の花よ顯れたる老

木とそれと張説せよ 確カリ 不思議

やまては ワキカル 其の音と聞まづる物

稽人のよぞと思ひよがのよあ

りける不思議さよ 行新メ こそはたこもは

実盛の サラリニ 其の出雲にてもます

か シテ抑ヘテ われる実盛が出雲あるが魂は

真途よありあから ワキカル 魄は此の世

よぞま ワキカル まりて サラリニ あほ執心の闇深

の世よ シテ 二百餘歳の程は極れども

ワキサリ  
浮ウキひもやらで藤原の

シテ抑ヘテ  
池のあだ彼夜となく

ワキサリ  
わがで心の闇の夢シテ抑ヘテもなく

ワキサリ  
現ウツもあま思シテ重モリトひをのみ中藤原

のち藤原の翁ササさびシラ草コ原の

翁ササの翁ササさび人ヒトあまかめそ假カ初ハジて

現ウツれ出デでたるス突ツ感カか名ナをシ使シ

給タマふあふフ七ナナの世ヨ語コトも恥ハりシとて

御ミコトおと立ちタチまりて行くイかカとト見ミれレハ

藤原の池ホトの邊ヘまでマ浮ウきキありて

失ウせセまマけりリ幻マヤカシとなりて失ウせセまマけりリ

いイゴゴやヤおオ時トキのノ稱ナ名ナにニてテ彼カのノ幽ユ

空ソラをヲ吊ツりリしシとト藤原の池ホトの邊ヘ

の法ホウのノ水ミヅ池イケのノ邊ヘのノ法ホウのノ水ミヅ深フカく

ワキカ上重モリ  
拍子ウチ三三合合ハハス

待マ待マ三三人人  
拍子ウチ三三合合ハハス

書入

七

ぞ頼む稱名の聲をみわたる由ひ  
 の初夜より後夜に至る迄心も  
 西へ行く月の光をたは曇あま  
 鐘を鳴して夜もすがら  
 南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛  
 極樂世界に行きぬれば長く苦  
 界と教えらるるにて輪廻の故郷隔た

後シテ実盛中  
 出端  
 抑ハテ盛シモリ

フキ中 確カリ  
 大教ヲイ合  
 抑キ合ハス

りぬ歎きの心くぐろや前は  
 不退の前命は無量壽佛にあま  
 頼もしや念々相續する人は  
 念々毎に生す南無と奉  
 ち是歸命阿彌陀と  
 其の行此の義を以て  
 の故必ず往生を得べしと

地  
 抑  
 シテ上  
 抑  
 シテ中  
 抑  
 シテ上

あり 有難や 不思議や 白  
 みあひたる 他 の 面よ 幽よ 浮ひ  
 寄る 老を 見れば あり つる 翁ある  
 甲冑を 穿する 不思議さよ  
 埋れ 木の 人 知れぬ 身と 沈めども  
 心の 他 の いひ 難ま 修 死 の 吾 患 の  
 おと 浮へて たり せ 給へ さま

ワキ

ワキ

○小謡

引れ 移よ 自 の あたり あり 姿を 染  
 と 餘人 は 更よ 見も 穿きも せて  
 たり 上人 の み 明かよ 見るや 姿も  
 残りの 空の 鬢 鬢 白き 老 武  
 老あれども 其の 出で 立の 華  
 やか なる 粧 殊よ 曇あま 月の  
 光 燈の 影 闇から ぬ 夜 の 錦

ワキ

ワキ



の直垂よ。夜の錦の直垂よ。前黄  
旬の鎧着て黄金作の太刀刀冷  
の身にそへば。それも。何の寶  
の。池の蓮の臺こそ。寶あるべし  
れ。げにや。疑わぬ。法の教へは。朽ちも  
せぬ。黄金の。臺。多くせば。あど  
かの。至らざるべし。あど。かは。至らざる

るべき。シテアリ上ニシテ  
量罪す。あは。ち。也。向。及。心。心  
と。跡。す。事。あ。か。れ。時。至。つ。て  
今宵逢ひ。強き。法。法。と。受。け。  
慚愧懺悔の。物語。あ。は。も。音。と  
忘れ。か。ね。て。あ。ま。は。似。た。る。藤。息  
の。草。の。か。げ。の。露。と。消。え。り。有

Shirashi

T

○獨吟

横語りやすべし シテ語リカケテ重シモリ 引いても。藤原  
 の合戦破れれば。源氏の方よし手  
 塚の太即光 オシカミツ 威 オモイ 本曾殿 ホソノノ の御前 ミマヘ  
 よしまりてやすやう。光威こそ奇 オモイ  
 異の曲者 イセ と組んでし首取つていへ。  
 大将 オウサマ かし見れば續く勢方もあり。  
 又 サムラヒ 侍 サムラヒ かし思へば錦の直垂 ナカササ とよきた

り。名 ナ 告 ツケ れ ヒ あ ノ れ ト 責 セ む レ とも終 ハ よ  
 名 ナ 告 ツケ ら ズ 声 コエ の坂東 バンドウ 聲 コエ にてい  
 と ホ 中 ナカ す。本 ホ 曾 ソノ 殿 ノ 天 アマ 暗 カクレ 長 ナガ 井 イ の齊 イソ  
 教 オシエ 子 コ 當 トク 々 トク 威 イ け テ や ア ら ラ ん  
 烈 セツ ら ハ 鬚 ヒゲ 鬚 ヒゲ の白 シロ 髪 カミ たる ベ き ガ。  
 黒 クロ き コ そ ノ 不 フ 審 シン あ レ 樋 ヒ 口 クチ の ハ 郎 ロウ の  
 見 ミ 知 チ り タ ら シ とも ト 名 ナ 告 ツケ れ カ だ。

樋口参りたる一目見ても  
 ちらし流してあま無残やお斎  
 飯列直にて作ひけるうや突  
 盛幸よ申し六十六は解つて  
 軍とせば若殿愿し争ひて先  
 とかけんも大人事な又老武  
 者もて人ごよあまつらんも借

○四逆難子

一のさへ。鬢髪と墨は漆ぬ  
 君やま付死すまよし。常々し  
 依ひしがまよし。漆ぬ。洗かせ  
 て御境のくちか。もあへす首  
 を持ち。御前とまつてあたり  
 ある。此の池波の岸は臨みて水  
 の縁も敷ふる。柳の糸の枝た

上三日月 申ビロ  
 ねて 朝霧もれては 月新柳  
 の髪と梳り 氷清えては 波音  
 昔の鬢と洗ひて 見れば 墨は  
 流れ落ちて もその 白髪と  
 りまけり げに 名と惜む 弓取  
 報もかくこそ あるべけれ やあ  
 らやさし やとて 皆感涙と 流

柳新

うくせ下 折らぬ 威を  
 けり 又 又 威が 錦の 直  
 を 着る 事 私 あらぬ 望 あり 宛  
 威 都 と 出 づ 時 字 威 公 子 中  
 す や う 故 郷 へ の 錦 と 着 て 帰 る  
 と 云 へ る 本 文 あり 宛 威 生 國 は  
 都 前 の 老 け て 依 ひ 一 年 迎 年  
 市 鎮 又 附 け ら れ て 武 志 の 長 井

柳新

よ。活住住り、依ひまき。此の度北國  
よ。死り下りて、いづの定めて。討死  
はるべし。考及の思ひ出されよ。色  
ぎ。ト。清免あれと。室み。かば。糸  
地の錦の直蚕とく。だ。賜。り。ぬ  
忽れ。古歌。も。も。み。ぢ。あ。を。な。け  
つ。行。け。バ。錦。着。て。家。よ。歸。る。と。

人。や。見。る。ら。ん。と。祿。み。も。此。の  
本。文。の。心。あ。り。さ。れ。む。古。の。朱。買  
は。は。錦。の。枝。を。と。云。程。山。よ。翻。し。  
今。の。突。威。ハ。あ。を。北。國。の。巷。よ。揚  
げ。隠。れ。あ。か。り。し。ら。ぬ。の。名。ハ。末。代  
よ。あ。り。あ。け。の。月。の。夜。す。か。ら。懺  
悔。物。語。中。さ。ん。切。げ。に。や。懺。悔

山崎

ロンキ地上

10

○独吟は舞

の物<sup>モノ</sup>緒<sup>ヲ</sup>心<sup>ノ</sup>の氷<sup>ノ</sup>の感<sup>カ</sup>清<sup>ク</sup>く。滑<sup>ク</sup>と疎<sup>ク</sup>。  
 一<sup>ニ</sup>珍<sup>ク</sup>みあ<sup>ハ</sup>ま<sup>シ</sup>。其<sup>ノ</sup>の執<sup>ク</sup>心<sup>ノ</sup>の修<sup>ム</sup>程<sup>ノ</sup>の  
 道<sup>ノ</sup>廻<sup>リ</sup>め<sup>グ</sup>りて又<sup>ハ</sup>ま<sup>シ</sup>。其<sup>ノ</sup>の曾<sup>ト</sup>と  
 くま<sup>ん</sup>したく<sup>み</sup>と<sup>テ</sup>羊<sup>ノ</sup>塚<sup>ノ</sup>め<sup>ハ</sup>よ  
 隔<sup>テ</sup>られ<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>念<sup>ハ</sup>は入<sup>リ</sup>ま<sup>シ</sup>あり  
 つ<sup>く</sup>兵<sup>ノ</sup>征<sup>ハ</sup>々<sup>ト</sup>。名<sup>ヲ</sup>告<sup>ル</sup>中<sup>ニ</sup>にもま  
 づ<sup>ツ</sup>進<sup>ム</sup>。羊<sup>ノ</sup>塚<sup>ノ</sup>の右<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>光<sup>ノ</sup>威<sup>ノ</sup>。  
 地上<sup>ノ</sup>サ<sup>サ</sup>リ

地<sup>ノ</sup>郎<sup>ノ</sup>等<sup>ハ</sup>主<sup>ト</sup>と付<sup>カ</sup>たせ<sup>ト</sup>。シ<sup>テ</sup>カ<sup>レ</sup>隔<sup>テ</sup>。  
 たりて突<sup>ク</sup>威<sup>ト</sup>。地<sup>ノ</sup>押<sup>シ</sup>並<sup>ハ</sup>へて組<sup>ム</sup>。  
 所<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>あ<sup>つ</sup>つ<sup>た</sup>れ<sup>ば</sup>お<sup>の</sup>れ<sup>は</sup>日<sup>ノ</sup>本<sup>一</sup>。  
 の<sup>ヤ</sup>剛<sup>ノ</sup>の者<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>ん<sup>ト</sup>や<sup>う</sup>す<sup>ま</sup>と  
 て。鞍<sup>ノ</sup>の<sup>マ</sup>前<sup>ノ</sup>痛<sup>ハ</sup>に押<sup>レ</sup>し<sup>テ</sup>付<sup>ケ</sup>て首<sup>ノ</sup>。  
 かし切<sup>ツ</sup>つて捨<sup>テ</sup>て<sup>ハ</sup>け<sup>り</sup>。其<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>。  
 羊<sup>ノ</sup>塚<sup>ノ</sup>の右<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>光<sup>ノ</sup>威<sup>ノ</sup>。右<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>にま<sup>は</sup>。

りて。拵を摺ると畳み揚げて。一  
刺す所をむすし紐んで二寸の間  
ま。とうと落ちけるが。老武者  
の悲しさは。軍よ。為疲れたり。  
風よ。ちがめる。枯木の力も折れて。  
手塚が下よ。ある所を。即等は  
落ちあひて。終よ。首をとば捨る落

きて。藤原のまを。あつて。影  
も形もあま。跡の影も形も南  
無阿弥陀佛。吊ひて。たび絵人  
跡吊ひて。たび絵人。

藤原

老武者

楊貴妃

概説

内四卷ノ三

唐の玄宗皇帝其寵妃楊貴妃を失ひ戀慕止み難く方士を以て其魂魄を尋ねしむ。方士天に昇り地に入り遍く覓めしと見えず。去つて蓬萊宮に到り太真殿を訪へば玉容寂寞として珠簾の裡より貴妃は出で來れり。方士は貴妃に逢ひし證に形見の品を賜はれと請ふ。貴妃乃ち其挿せる玉の釵を取りにて與ふれば、かゝる世に類ある物よりも帝と御身と人知れず契り給ひし言の葉を得て復命せんと言ふ。貴妃もことわりと思ひ、天に在らば願はくは比翼の鳥とならん、地に在らば願はくは連理の枝とならんとの誓詞を語り、舞をまへば、方士は釵を携へて都に歸り、貴妃は涙なごらに留りけり。

唐の玄宗皇帝其寵妃楊貴妃を失ひ戀慕止み難く方士を以て其魂魄を尋ねしむ。方士天に昇り地に入り遍く覓めしと見えず。去つて蓬萊宮に到り太真殿を訪へば玉容寂寞として珠簾の裡より貴妃は出で來れり。方士は貴妃に逢ひし證に形見の品を賜はれと請ふ。貴妃乃ち其挿せる玉の釵を取りにて與ふれば、かゝる世に類ある物よりも帝と御身と人知れず契り給ひし言の葉を得て復命せんと言ふ。貴妃もことわりと思ひ、天に在らば願はくは比翼の鳥とならん、地に在らば願はくは連理の枝とならんとの誓詞を語り、舞をまへば、方士は釵を携へて都に歸り、貴妃は涙なごらに留りけり。



此曲戀慕ノ心ヲ旨トシテ優ニ詠フベシ  
小書・甲掛リ 彩色舞 臺留

シ テ 揚 貴 妃	ワ キ 玄宗皇帝 勅使方士	役 別	装 束	附	季	月	八	所
			着附厚板 側次(又法被毛) 白大口 腰帶 扇					殿真太宮榮蓮界仙
			面若女 髪 髪帶 着附指箱 唐織坪折 緋大口 箔地腰帶 葛扇 天冠袂ニ出ス					
					曲柄	三番目(髪物)		
					信古	三級		

揚貴妃

禪竹氏信作

ワキ勅使上 用ガ  
次才 ヨワク  
指ニ合

わがまだ知らぬ東雲のわがまだ  
知らぬ東雲の道といつくくと尋  
ねん 早約ドツシリト モロロシ  
仕へ申す方士あてのさそもわ  
が君改正一くまます中に  
色と重んぶ艶と専と一吟み

揚貴妃

よより。容ヨウ色シキし無ム雙ソウの美人ビョウジンを得  
たまふ。揚ヤウ家カの娘メたるよよりて  
其シの名ナと揚ヤウ貴キ妃ヒと号ガクす。然シカ  
れどもさる子コ細ホあつて馬ウマ嵬ガイが原ハラ  
ほて失シひ中ナカして作サク餘ヨり帝  
款ケかせ給タマひ。急キウぎ魂コン魄ハクのありか  
と尋タねて事コトれよの宣ノボ旨シは任

せ。上カミ望ノゾ落ラク下シモ黃クワ泉センまで尋タね  
やせども。更さらは魂コン魄ハクのありか  
知らずいごよ。未いまだ蓬ホウ萊ライ宮キヤウよ玉タマ  
らす依よ預よる。此こゝの度タビ蓬ホウ萊ライ宮キヤウに  
と急キウぎ依よ預よる。通ツウ行コウ上ジョウ用ヨウサ  
かあつてよても。幼コウもかあつてよ  
ても。魂コンのありか。は其シ處トコロも。

彼踏をど分けて行く舟のほのか  
と見えし鳴山の草の假寐の枕  
ゆふ常世の國よ多きよけり常  
世の國よ多きよけり急ぎの程  
よ。蓬萊宮よ多きよけり此の處に

て妻一く妻ねがやしなじゆ狂言  
ありし教へは随つて蓬萊宮に  
カニ上  
抽合

来てかたれども宮殿盤がとて  
さらは邊際もあく。法教親が  
とてさあから七寶とちりば  
めたり。漢宮萬里の松。長生  
瓊山の香換もされよふさらにお  
うらまへからず。あら美一の前  
やお又教への如く室中と見れば。

太真殿と顔の折られたる宮あり。  
まづ此の可又能回し。事の由を

もうかひははやしなと作

シテ女カニ上昔の獲山の妻の園よ。共よ眺めし  
花の色。移れば。妻る習とそ。今  
は蓬萊の秋の洞よ。獨り眺むる  
月かげも。儒と顔ある。族かお

中用九心

あら恋の古やあ。唐の天子

の勅の使。方士られ送まりたり。

玉妃の内よ。ましますか。ある唐

帝の使と。は。行しよ。さよ。来れ

る。うと。九華の帳を押しつけ

て。玉の簾を。かけつ。立ち出

で。絵ふ御姿。雲の鬢。つら

花の顔はせ ワシ 寂寞たる清眼 ワシ  
の内は。涙と浮へさせ給へむ

上三青 押ミ 拍子三合 小謡

梨花一枝。雨と帯びたる粧の。  
雨と帯びたる粧の。太液の。  
蓉の紅未央の柳の緑もこれ  
よのいかに優るま。げにや六宮の  
粉黛の顔色の無きも。ことほり

や顔色の無きも。理や。女中に  
かしよげの。さても后宮せよ  
ましまし。時たふも。朔政は急  
り給ひぬ。況んやかくあらせ給  
ひて後。たふしたすらの御款  
子。今。は御命もあやかく見えさ  
せ給ひて。ぬ。致れば宣旨よ。任せ

これ送事ぬきり。御姿と刀を  
 事。たぐられ君の御志。侍からざ  
 りし故と思入。愈々御痛の志う  
 ころ候へ。げにげに母がす  
 如く。今のかたひあまの身の露の  
 あるにもあらぬ魂のありかと。  
 これ送事ぬき事。侍情は

似たれども。訪あつらひのま  
 り。枯れがれあらばあかあかの  
 便の風の恨めや。又今交の戀  
 慕の涙。旧里を思ふ魂を消す。  
 早かる上、  
 急ぎ歸りて奏聞せん。さうな  
 から御形見の物とたび給へ

シテ用カニ

引れこそありし形見よとて玉  
 の銀取り出でて方士よ其へたび  
 ければ早用ウケテやと又これの世の中は  
 たぐひあるべき物あれどいかでか  
 信じ給ふべき。御身と君と人知  
 れず。契り給ひし言の葉あら  
 ばカル上うれと證よやすべし

シテ用カニ

げにげおそれも理あり。思ひぞ出  
 づるわれもまた其の初秋の七日  
 の夜二星よ誓ひし言の葉にも  
 天よ在らば願をくわは翼の鳥と  
 あらん地よ在らば教はくは連理  
 の枝とならんと誓ひし事と  
 密かに傳へよや私語あれども今

陽春記

二

儂れ初むる儂かなホノノ 舞マユれども  
 夢の中ユメノナカのホノノ舞マユれども夢の中の流ル轉マユ  
 生死シノビの習ナラふて其ソノの身ミの馬ウマ竅アナは  
 留トドマり魂タマの仙セ宮ミヤよ至キりつツ比ヒ翼ツバも  
 友トモと戀コイひ獨ヒトり翅ツバとツかたカきキ連レ  
 理リも枝エ朽クちちて忽トち色イロとト衰シ  
 すとも同ドウじし心ココロの行ユク方カタあらラばハ

終ツキの逢ヘふフ 儂ホノノと頼タノむムろロと語コトり  
 終ツキへヘやヤ コウロキニギハヤヒ さらばと云イハひヒて出デで  
 毎マのマともトモあアひヒ中ナカしシ悔クハるルことコト思オモ  
 はハ嬉ヒしシさサのノあアはハ如ニ乎カなナらん  
 その心ココロ シテ上 われはハ又マタあアにニあアりリなナり  
 にニ三ミ重ヘのノ帯オビ廻マりリ逢ヘはハんンもモ知チら  
 ぬ身ミよヨ サえエ入イらラばバ習ナりリ待マてテあア



夜遊をおすべし甲 上地 げにや  
 穢山の宮の裡 月の夜遊の羽  
 衣の曲 しののかがしにて舞ひ  
 しとて 又取りかぎし 舞す独  
次身内 雨カニ 雨の曲よや 電裳羽衣の曲よ  
 や 電裳羽衣の曲よ 舞るよ 濡  
 る 袂かな 物着 拍ま合六  
シテ上 明カニ 神シゴリ 何事も 夢幻の

シテサシ上 用カニ  
○サシ曲 独今  
○切是舞子  
 戲や 地 カサチ 雨カニ あそれ 胡蝶の 舞あらん  
シテクリウツリ 引れよ 去を 冬の 音を 思へ いと  
 衆生の 初と 志らす 未来 永々の  
 流精 更よ 生死の 終も あ  
シテサシ上 用カニ 舞るよ 二十五有の うち げれ かな  
 者 必滅の 理よ 偏れん まづ 天上の  
 五婁より 須弥の 四洲の 換ぐよ 北

明の千年終に朽ちぬいんや  
 老少不定の境歎の中の歎と  
 カヤ新もそのかみは上界の  
 諸仙たるが昔のちあみありて  
 假に人界に生れ来て揚家の深  
 窓に養われ未だ知る人あり  
 君聞しるされつゝ急ぎし物だ

后宮に定め置きの給ひ借老同宛  
 のかたらひも縁盡きぬれば後らに  
 又此の鳴は唯一人歸り来りて  
 すむ水のあをれをのみき身の露  
 のたまさか逢ひ見たり静は  
 静れ憂き昔引くるはても思ひ出  
 づれば恨あるまの文月の七日の夜

君とかはせし睦言の比翼連理の  
 言の葉もかれかれに鳥ささめごと  
 の筈の一夜の契だよ。み跡の思ふ習  
 あるよ。まゝしてや年月別れて経る  
 芝の中よ。さらぬおのあかりせば。ま代  
 も人よ。の添ひてまゝよし。それとて  
 も遁れ得ぬ。云者定部ぞと聞く。時の

逢ふこそみありけれ。羽衣の曲（序ノ舞）  
 羽衣の曲。罕にぞ返す。小女子（カキ）  
 袖打ち振れる。心著しや。心著しや。  
 恋しき音の物語。恋しき音の物  
 語。盡くさば。月日も後り舞の。あき  
 しの。銀又賜はりて。暇やして。さらば  
 きて。勅使の都に。歸りけれ。ハ

シテサカサカ  
 くるるにてもさきほつても君よの此の  
 世違ひえん事も違ひ鳴つどり。  
 浮世あれどもさうや音ばかりあや  
 しのどことよの臺は伏し沈みて  
 ぞ留まりける。

### 玉葛

概説

内四巻ノ四

諸國一見の僧、大和國初瀬寺に詣んとて初瀬川邊に到りたると、小舟に棹  
 さし上り来る女あり。如何なる人ぞと尋ねれば、初瀬寺に参る者なりとのみ  
 答へて僧を案内し、四方の風景を賞しつゝ、御堂に到り、更に二本の杉に  
 導き、其杉に縁ある玉葛の内侍の昔物語をなし、跡を弔ひ給へると其身  
 の玉葛の内侍なることをほのめかして姿を隠しぬ。仍りて僧は讀經しむた  
 る處に、玉葛の靈現れ、法の教に達して妄執を晴し、菩提の道に入り得た  
 るを喜びて失せけり。

此曲總シテ関カニサヲリト余リ重カクメ様ニ諾フベシ

後シテ	前シテ	ワキツレ	ワキ旅	役別
玉葛内侍	里女	從僧二人	僧	
面増髪 髪 髪帯 着附袴 唐織尻かけ 葛扇	面若女 髪 髪帯 着附袴 水衣 腰巻 棹	角帽子 着附無地履斗目 縷水衣 腰帶 珠敷 扇	角帽子 着附無地履斗目 縷水衣 腰帶 珠敷 扇	装束附
(目番三) 目番四	曲柄 起智古噴	月	九	季
級 三		瀬初御城磯園和大		所

玉葛

禪竹氏信作

ワキ僧内 関カニ

引れは諸國一見の僧まで候わ  
れ此の程は南都みいひて。靈佛  
靈社跡のあぐねみめぐりていよ

道行三上 用カニ

ヨツク 拍子ニ合ヤ

これより初瀬詣と志してい  
あらもの名の。名におま宮のふる  
こと。名におま宮のふること。

思シひつツけてケてテ行イくク末スのノ石イの上ノ寺ニ  
 伏フしシ拜イみミ法ホウのノ志シやヤ三サ輪リンのノ  
 杖ツ山サン本ホン行イけケばバ初ハツ瀬センもモあアくク初ハツ瀬セン  
 川カハにもモ急イきキよヨけケりリ初ハツ瀬セン川カハにニ  
 もモ急イきキよヨけケりリ初ハツ瀬セン川カハにニ  
 初ハツ瀬セン川カハよヨ急イきキよヨてテ休ヒ心シン静シみミ糸イ  
 詠エイがガさサらラずズるルはハてテ休ヒ

シテ女上門カニ  
一声  
抽子合ハズ  
 程ハもモあアきキ毎マイのノ白ハクりリやヤ初ハツ瀬セン川カハ  
ウズらラりリかカねネたタるル景ケイ色シキかカなナ毎マイ人ジンもモ  
 初ハツ瀬セン川カハよヨ急イきキよヨてテ休ヒ心シン静シみミ糸イ  
 詠エイがガさサらラずズるルはハてテ休ヒ

げケにニ聲コエ立タてテこコかカれレ来キにニけケるル古コ  
 のノちチてテもモいイさサやヤ白ハク浪ナミのノよヨるル  
 べベいイづヅくクぞゾ心シンのノ月ツキのノ声コエ毎マイのノうウそソ  
 とトちチてテもモあアきキ毎マイのノ白ハクりリやヤ初ハツ瀬セン川カハ

下

下

〇小謡  
 上手ウデマシのノ伸ノビビビリ  
 暮クれレてテ行ユくク。秋アキのノ後ノチかカ村ムラ時トキ雨アメ。秋アキ  
 のノ後ノチかカ村ムラ時トキ雨アメ。ふるル川カハ野ノ邊ヘのノさサむム  
 しシくクもモ。人ヒトやヤ見ミるルらラんン身ミのノ強ツヨクもモ  
 あアなナ浮ウ舟フネのノ楫カヌエとト絶ツえエ。綱ツナ手テかカなナ  
 しシきキ。類ルイかカあア綱ツナ手テかカなナしシきキ類ルイ  
 かカあア。不フ思シ議ギやヤあアはハのノ川カハはハ山ヤマ川カハ

のノさサもモ浅アサくクしシくク志シかカもモ淺アサるル岩イハ間マ  
 傳ツタひヒとト。おオさサこコのノ舟フネはハ棹ササさサすス人ヒトと  
 見ミれレばバ女メあアりリ。そソもモ御ミコ子コあアめメらラなナるル  
 人ヒトあアてテまマしシまマすスぞゾ。こコれレはハ此ココのノ  
 初ハジメめメ寺テラよヨ後ノチでデくるル者モノなりリ。又マタあ  
 川カハのノ前マエからカラあアるル流ナガレれレたタるル蚕アハ小コ舟フネ。  
 初ハジメめメのノ川カハとト縁ヰみミ置オケけケるル其ソノのノ川カハ

○独吟

の邊のえさあるよ不審かあさせ  
 珍ひそとよあら面白の言ぢや  
 あげに蚤お舟初漱とらさきあが  
 めの詞あるべしごうあから又其の  
 も浪お舟さして謂のあるやらん  
 いや何事のそれよりもまづは覺  
 せよお柄よほの息えて色づく

くおの初漱山色づくおの  
 初漱山舟もうらみ雲よ日  
 影も白み入のそあ景色も  
 く川の浦曲の眺までげに類  
 や面白や音聞えて里つま  
 奥物深き谷の戸よつらある軒  
 と絶えだえの霧間よ跡す夕

下

四



かな霧間に疎す夕かな霧かゝる  
 清堂よありつゝかゝる刺邊シ清堂よま  
 りつゝ補陀洛山も目のあたり  
 四方の眺も妙なるや紅塔の色  
 に常盤木の二本の枝よきまよ  
 けり二本の枝よきまよけり。  
シテ向気ヲカキ  
 されこそ二本の枝よきまよへん

出窓へ入ワキサラリりては二本の枝よき  
 けり納合二本の枝の立所  
 とも尋ねずる古川の邊よきまよ見  
 まりやとは行し縁まられたる古  
 歌にて作ぞシテ向カニされは光源氏の  
 古玉昔の内依汝の初瀬に宿て  
 珍ひしと右近とかや見ありて

詠みし歌あり。其よあはれと思  
 し。白く御跡とよく吊ひ給ひ  
 御へ地上朝サアリげにやありし世とあはゆ  
 ふ類の露の身の。消えおし跡  
 はあかなかな行撫子の形見も憂  
 あり。あはれ思ひの玉昔。かけて  
 もいさや知らざりし。はづりの

○サン由種吟

幸ハナハシニサレ上ニ

木の間の月。雲居のよららつ  
 しかと鄙の住居の憂まのふか  
 きてしも終えてあふまを  
 けは志をりつる。人の荒き浪風  
 立ち隔て便とあれは早舟よ  
 乗り遅れし松浦写唐去船と  
 慕ひしよ。よそ愛るわれはた

浮嶋と漕ぎ歌れても行く方や  
つづく白浪の響の聲も  
過ぎ思ひは障る方もある  
都の内とてもわれは浮きたる  
舟のうちあはれや夏まき目と水鳥  
の陸は感へる心地してたづまも  
知らぬ方の程と思ひ歎きて行き

暁も足曳の大和路や唐土まで  
も聞ゆある初瀬の寺は訪てつ  
年シテ上も経ぬ祈る契は初瀬山尾上  
の鐘のよもうまのみ思ひ絶えあし  
古の人よ二度二本の杖の立所と  
書ねずめある川の邊と詠めける  
今日の逢ふ敵も同ト牙と思へば

法ハフの衣ウエの玉タマあらニ玉タマ昔ムカシ迷マヨひヒと照テ  
ハフ給タマへニやカ げハにニ古コのノ世セのノ物モノ借カ 聞ク  
ハフけハバハ海ウミもモさサもモりリ江エよヨもモれレるルあア  
ハフのノあアはハれレかカあア ハフあアはハれレもモ思オモひヒ初ハツ  
ハフめメよヨ初ハツ瀬セ川カハ早ハヤくクもモ知チるルやヤ海ウミかカらラぬヌ  
ハフ縁ヰよヨひヒかカるル心ココロとトそソ ハフたタがガ頼タノむム  
ハフぞゾよヨ法ハフのノ人ヒト 吊ツルひヒ給タマへニわワれレこコそソはハ

ハフ後ノチのノ霧キリのノ玉タマのノ名ナとト名ナ告ツクりリもモやヤらラずズ  
ハフなりナリにニけケりリ名ナ告ツクりリもモやヤらラずズあアりリにニけケりリ  
ハフココそソはハ玉タマ昔ムカシのノ内ウチ侍シ假カにニ現アれレ給タマ  
ハフひヒけケるルやヤたタとトひヒ業ゴト因ユ重シくクとト  
ハフもモ 照テさサのノさサらラめメやヤ日ヒのノ光ヒカリ 照テさサ  
ハフざザらラめメやヤ日ヒのノ光ヒカリ 大オホ慈ニギハヤ大オホ悲ニギハヤのノ誓チカきキ  
ハフあるアル法ハフのノ燈トウ明メイかカよヨ七ナナきキ影カゲいイさサやヤ

○切定  
一調一  
切定  
雑子

ワキ門 関カニ

上侍 三人  
照子三念

拍子三合六カ九上

中入向

吊ツッン亡キ款イゴヤ吊ッッン

後シテ女中  
一声  
拍子合ハス

惚ヒわタる牙ハラれあらず玉苧

如ク今アあル筋トと尋ね来ぬらん表

ねテも法の教子逢しもの心ひり

る一筋子そのまあらず玉葛草

の乱る色の恥カリやつくもガミ

つくも髪われや惚あらず面款目

又立つやあだある塵の牙ハラウ

拂へど拂へど執心のあかま周圍

路や黒髪のあかぬわいつの寝寝

乱れ髪友はすなれゆく思ひカア

○独吟  
○仕舞  
月上カサリげに妾執の雲霧のあらず妾執の

雲霧の迷ひもすや憂カりけ

る人と初漱の山房烈く落て

五言

九

露も涙も殺ぐは秋の葉の牙  
も朽ち果てぬ恨めや恨は  
人とも世とも恨の人とも母を  
も思ひ思ひの報の罪  
や救々の憂き名よ立ちしも恨  
悔の者根或は傷き返りの岩漏る  
おの思ひは咽び或は焦るや身

より出づる玉と見るまで色めども  
螢に乱れつる影もよあや恥  
かやしの水の交執と翻す心は美  
如の玉昔心の真如の玉昔長ふ  
夢路のそめよけり。

融

概説

内四卷ノ五

東國の僧都に上りて六條河原院の舊跡に赴き、所の様をながめたる處に  
老人田子を肩げて出で來れるより、こゝは海邊にてもなきに不審と尋ねれば  
昔融の大臣、陸奥の千賀の塩竈の風光をめで、此所にうつし、難波の浦より  
日毎に汐を汲ませて焼かせつゝ、一生御遊のたよりと一ければ、我を塩汲とい  
はんとよーと語るうちに月出で、今は荒れ果てたる跡に、老人昔を戀ひ慕ひ  
て止まず、やゝありて僧の尋ねるがまゝに、見えわたりたる名所を教へたる後  
汐曇りにまぎれて見えすなりぬ。僧は尚も奇特のあらんかと假寐せる夢に  
融の大臣現れ、古へ此所にての遊舞の様を見せしが、夜も明けかゝ頃其姿  
も消え、夢もさめけり。

此曲前、関カニ確リト後ハ淀ニナクサラリト謡フベシ  
 小書 宛 今合迄 抄ノ舞 脇留

役別	装束	季
ワキ旅僧	角帽子 着附無地雙斗目 水衣 腰帶 扇 珠敷	八月
前シテ老翁	面笑耐(朝倉耐ニ) 耐髮 着附無地雙斗目 茶水衣 腰帶 腰裏 耐扇 田子	曲柄 管吉順
後シテ源融大臣	面中將 初冠嬰 赤金鉢巻 着附赤地縫箔 單袴衣 込大口 指貫 腰帶 扇	目 番 五 級 三

融

観阿彌清次作

ワキ僧 門 明カニ

これハ東國方より出でたる僧  
 して作われ来た都と見ずの程よ。

此の度思ひ立ち初るよ上りゆ  
 思ひ立ちつ心ろ志ろべ雲と分け毎  
 路を後り山を越え。千里も同  
 一足よ千里も同 一足よ



上<sup>ウヘ</sup>あ<sup>ア</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>ね<sup>ネ</sup>朝<sup>アサ</sup>毎<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>夕<sup>ユフ</sup>夕<sup>ユフ</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>ね<sup>ネ</sup>朝<sup>アサ</sup>  
 毎<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>宿<sup>ヤド</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ナ</sup>跡<sup>アト</sup>も<sup>モ</sup>重<sup>カサ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>教<sup>シヨク</sup>  
 又<sup>マタ</sup>早<sup>ハヤ</sup>く<sup>ク</sup>急<sup>イサ</sup>ま<sup>マ</sup>よ<sup>ヨ</sup>け<sup>ケ</sup>り<sup>リ</sup>教<sup>シヨク</sup>又<sup>マタ</sup>早<sup>ハヤ</sup>く<sup>ク</sup>  
 急<sup>イサ</sup>ま<sup>マ</sup>よ<sup>ヨ</sup>け<sup>ケ</sup>り<sup>リ</sup>急<sup>イサ</sup>ま<sup>マ</sup>よ<sup>ヨ</sup>け<sup>ケ</sup>り<sup>リ</sup>急<sup>イサ</sup>ま<sup>マ</sup>よ<sup>ヨ</sup>け<sup>ケ</sup>り<sup>リ</sup>  
 れ<sup>レ</sup>の<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>や<sup>ヤ</sup>都<sup>ト</sup>よ<sup>ヨ</sup>急<sup>イサ</sup>ま<sup>マ</sup>て<sup>テ</sup>い<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>た<sup>タ</sup>り<sup>リ</sup>  
 と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>條<sup>ジョウ</sup>河<sup>カ</sup>原<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>院<sup>イン</sup>と<sup>ト</sup>や<sup>ヤ</sup>ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>中<sup>チュウ</sup>し<sup>シ</sup>候<sup>コウ</sup>  
 暫<sup>シブ</sup>く<sup>ク</sup>休<sup>ユス</sup>ら<sup>ラ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>一<sup>イチ</sup>見<sup>ミ</sup>せ<sup>セ</sup>る<sup>ル</sup>や<sup>ヤ</sup>と<sup>ト</sup>思<sup>オモ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup>

三<sup>ミ</sup>射<sup>セ</sup>上<sup>ジョウ</sup>  
 一<sup>イチ</sup>声<sup>シヨウ</sup>  
 拍<sup>ハク</sup>子<sup>シ</sup>合<sup>カ</sup>ハス  
 明<sup>メイ</sup>分<sup>ブン</sup>三<sup>サン</sup>射<sup>セ</sup>上<sup>ジョウ</sup>

月<sup>ツキ</sup>も<sup>モ</sup>は<sup>ハ</sup>や<sup>ヤ</sup>出<sup>デ</sup>夕<sup>ユフ</sup>又<sup>マタ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>塩<sup>シホ</sup>言<sup>コト</sup>庭<sup>ニワ</sup>の<sup>ノ</sup>  
 浦<sup>ウラ</sup>さ<sup>サ</sup>び<sup>ビ</sup>渡<sup>ワタ</sup>る<sup>ル</sup>景<sup>ケイ</sup>色<sup>シキ</sup>か<sup>カ</sup>な<sup>ナ</sup>陸<sup>リク</sup>奥<sup>オク</sup>の<sup>ノ</sup>  
 づ<sup>ヅ</sup>く<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>れ<sup>レ</sup>ど<sup>ド</sup>塩<sup>シホ</sup>言<sup>コト</sup>庭<sup>ニワ</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>み<sup>ミ</sup>  
 て<sup>テ</sup>後<sup>ノチ</sup>る<sup>ル</sup>者<sup>モノ</sup>が<sup>ガ</sup>牙<sup>キバ</sup>の<sup>ノ</sup>よ<sup>ヨ</sup>う<sup>ウ</sup>る<sup>ル</sup>べ<sup>ベ</sup>も<sup>モ</sup>い<sup>イ</sup>さ<sup>サ</sup>や<sup>ヤ</sup>  
 定<sup>サダメ</sup>め<sup>メ</sup>あ<sup>ア</sup>き<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>心<sup>ココロ</sup>も<sup>モ</sup>休<sup>ユス</sup>め<sup>メ</sup>る<sup>ル</sup>水<sup>ミヅ</sup>の<sup>ノ</sup>面<sup>オモテ</sup>よ<sup>ヨ</sup>  
 照<sup>テル</sup>る<sup>ル</sup>月<sup>ツキ</sup>並<sup>ナミ</sup>と<sup>ト</sup>数<sup>カズ</sup>あ<sup>ア</sup>れ<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>今<sup>イマ</sup>宵<sup>ヨイ</sup>そ<sup>ソ</sup>秋<sup>アキ</sup>  
 の<sup>ノ</sup>家<sup>イヘ</sup>中<sup>ナカ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>げ<sup>ゲ</sup>又<sup>マタ</sup>や<sup>ヤ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>ば<sup>バ</sup>塩<sup>シホ</sup>電<sup>デン</sup>

の月も都の最中トノナカカあるカ秋は  
中ナカばバ牙キはハ既スにニ老コいイ重オモあアりリてテ諸シヨ白ハク  
髪カミ髪カミのノ上ウヘ寄ヨりリのノみミ積ツりリぞゾ来キぬヌるル  
年トシ月ツキのノ積ツりリぞゾ来キぬヌるル年トシ月ツキのノ  
春ハルとト迎ムカへヘ秋アキとト添ツへヘ時トキ雨アメをヲ松マツのノ  
凡ナニまマでデもモわワがガ牙キのノ上ウヘとト汲ツみミてテ  
知チるル夕ユフ別ワケ衣ヒラカ社ヤ寒サムきキ浦ウラ曲マヅリのノ秋アキ

の。夕ユフべベかカあア浦ウラ曲マヅリのノ秋アキのノ夕ユフべベかカあア。  
あアまマもモあアれレあアるル射シヨウ殿テン御ミ牙キのノあア  
たタりリのノ人ヒトかカかカいイびビ此コノのノ震ユレのノ夕ユフ汲ツみミ  
よヨてテ依ヨりリ不フ思シ議ギわワらラはハ海ウミ色イロはハてテも  
あアきキよヨ夕ユフ汲ツみミのノ誤アヤマりリたタるルかカ射シヨウ殿テン  
あアらラ行イくクもモなナやヤさサてテてテをヲばバ  
らラづヅくクとト知チるル一ヒトとト言イはハれレてテ依ヨりリぞ

洲シナガシマの邊とゞは條河原の院とこそ  
 承りてゆへシテ用カニ河原の院こそ塩竈  
 の浦ゆふ融ヒラカハの大匠陸奥の子賀  
 の塩竈と。都の内よ移されたる  
 海邊あれは名よ流れたる河原  
 の院の河水とも汲め池ありとも  
 汲めとゞ塩竈の浦人あれは汲  
 汲めとゞ塩竈の浦人あれは汲

とあどあほさぬやワキげにげよ  
 陸奥の子賀の塩竈と。都の中  
 よ移されたる事承り及びて候。  
 さてはあれあるの難が碓作か  
シテ用カニさしゆあれこそ難が碓ゆふ融の  
 大匠常は海舟と考せられ。寺  
 酒宴の遊舞様々なりし可ぞ

カ。月こそ出てて人ひおげよ

月の出てゝいそや。あの籬が鳩の森

の指よ。鳥の宿し。わたりて。志もん

は移る月。歎までも。お毎よ。歸る

かの上か。思ひ出でられてい

何と。只今の。面前の。景色。色か。僧

の。身。身よ。知らる。々々。と。つ。も。も。も。も。買

シテ月を巻ハカル心

○小謡

鳩が。詠やらん。鳥の。宿す。他中

樹僧は。鼓く。月下。の。げ。推すも

鼓くも。古人の。心。今。目前の

秋。言よ。あり。げ。は。や。古。も。月

よ。子。賀。の。塩。竈。の。月。よ。は。子。賀

の。塩。竈。の。浦。曲。の。枝。も。は。あ。て

松。月。も。あ。つ。あ。り。や。霧。の。籬。の。碇

隠れ。いざわれも立ち渡り。昔の  
跡と陸奥の子賀の浦曲と。眺  
んや子賀の浦曲とあかめん。

塩竈の浦と越の内子後されたる

謂御礼語ゆへ 磯磯の天皇の法

宇子融の大臣陸奥の子賀の塩

竈の眺を聞しる及ばせ給ひ。

先ラカサリマニ

この後よ塩竈と移し。あの難波

の津津の浦よりも日毎よ潮と

汲ませるにて塩と焼かせつ。一生

舟遊の便より給ふ。然れどもその

後の相續して競ふ人もあけれ

べ。浦はそのまゝ千の夕とあつて池

邊よ後む溜り水の雨の跡の古

柳ハメニ  
柏子合ハク  
ツヨク  
カハル上  
用カニ

まいよ。落ち葉散り。深く松影  
 の。月だよ。霞まで。秋風の音のみ  
 あり。されば。秋の音のみ。君  
 まさで。煙絶え。塩竈の。浦林  
 しくも。見え渡る。かな。貫之も  
 詠めて。依ヨクけに。や。眺むれ。月  
 の。み。満てる。塩竈の。うら。淋しく

○小謡

も。怠れ。果つる。世までも。志  
 ほど。みて。老の。彼も。歸る。やらん。あ  
 ら。音。急イナトや。急イナトや。急イナトや。と。慕  
 へ。も。歎け。さ。も。か。ひ。も。あ。ま。さ  
 の。浦。子。鳥。音。と。の。み。鳴。く。ば。かり  
 あり。音。と。の。み。鳴。く。ば。かり。あり  
 早ハヤ。今。又。耐。殿。見。え。わ。た。り。た。る。あ。々

皆名可<sup>シテ</sup>ありてぞ作らん御教へ<sup>カニ</sup>  
 作<sup>シ</sup>し作皆名可<sup>シテ</sup>にてい。御尋ね<sup>カニ</sup>  
 へ教へ<sup>カニ</sup>し作べ<sup>カニ</sup>。作<sup>カニ</sup>あり<sup>カニ</sup>あれ<sup>カニ</sup>  
 見えたるの音羽山<sup>ヤマ</sup>作<sup>カニ</sup>か。作<sup>カニ</sup>ん作<sup>カニ</sup>  
 あれ<sup>カニ</sup>こそ音羽山<sup>ヤマ</sup>はよ。作<sup>カニ</sup>音羽山<sup>ヤマ</sup>音<sup>カニ</sup>  
 こそ<sup>カニ</sup>きつ<sup>カニ</sup>邊坂<sup>ヤマ</sup>の。開<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>此方<sup>カニ</sup>よと<sup>カニ</sup>縁<sup>カニ</sup>  
 みたれ<sup>カニ</sup>。邊坂<sup>ヤマ</sup>山<sup>ヤマ</sup>も<sup>カニ</sup>程<sup>カニ</sup>近<sup>カニ</sup>うこそ<sup>カニ</sup>作<sup>カニ</sup>

らあ<sup>シテ</sup> 作<sup>カニ</sup>の如く開<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>此方<sup>カニ</sup>よと<sup>カニ</sup>ハ  
 縁<sup>カニ</sup>みたれ<sup>カニ</sup>とも。あ<sup>カニ</sup>あた<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>あた<sup>カニ</sup>れ<sup>カニ</sup>ハ邊<sup>カニ</sup>  
 坂<sup>カニ</sup>の。山<sup>カニ</sup>は音羽<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>峯<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>隠<sup>カニ</sup>れて<sup>カニ</sup>此<sup>カニ</sup>  
 の邊<sup>カニ</sup>より<sup>カニ</sup>見え<sup>カニ</sup>ぬ<sup>カニ</sup>あり<sup>カニ</sup>。作<sup>カニ</sup>て<sup>カニ</sup>さ<sup>カニ</sup>そ<sup>カニ</sup>  
 音羽<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>巖<sup>カニ</sup>つ<sup>カニ</sup>ま<sup>カニ</sup>は<sup>カニ</sup>第<sup>カニ</sup>次<sup>カニ</sup>守<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>山<sup>カニ</sup>并<sup>カニ</sup>  
 の<sup>カニ</sup>名<sup>カニ</sup>可<sup>カニ</sup>名<sup>カニ</sup>可<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>珍<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>お<sup>カニ</sup>入<sup>カニ</sup>。作<sup>カニ</sup>語<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>も<sup>カニ</sup>  
 盡<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>こそ<sup>カニ</sup>その<sup>カニ</sup>城<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>教<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>中<sup>カニ</sup>山<sup>カニ</sup>清<sup>カニ</sup>

閑寺カンシカニ今イマ然ハ野ノとハあレどカト  
ワキ云ハてシ其ノ末ノ又ハ續ツまタる。里一材ノ  
 森ノ樹立 シテ引レれと志スべシおハ後ニ  
 せよ。まだまき時雨の秋あれば紅  
 葉も青らい。稻荷山 ワキ風も蒼々  
 れ行く。雲の端の指も青らい秋  
 の色 シテ今ハこそ秋ノ名ヲ負ヒ

雲ハ花ノ下ノ藤ノ森 ワキ緑ノ空  
 も軟青き野山又ハ續ク里ハ如ク  
 小シあれてそ夕暮れば ワキ野邊  
 の秋風 シテ外ノ志スみて ワキ鶉鳴く  
 あり シテ深草山ノ又ハ ワキ木籬山依ん  
 の竹田渡鳥羽も見えたりや  
ワキ眺めやる。そあたの空ハ白雲のむ

○獨今  
ワキ○ ワキ



や暮れ初むるを山の嶺も木深  
く見えたるは如くなる可あら  
んシテ用カ割れてそ大原や小塩の山  
も今日こそそカ初めつらめ  
高々問はせ給へや上地サ吹くまつけ  
ても秋の風吹く方あれや嶺續  
き西よ見えゆるは何くぞシテ用カ秋もは

や秋もはや半更けゆく松の  
尾の尻山も見えたり甲嵐あけ  
ゆく秋の夜の空澄み昇る月  
教よシテよす夕時もはやこきて  
際も朽地てる月よめでシテ興よ  
葉シテどて日新とべげよシテ高れたり  
秋の夜の長物語甲あやまつ

いざやゆとほまんぞて持つやた  
 この浦東からげの夕衣ぬめ  
 ば月をも袖ももちけのけり  
 帰る彼の夜の老人と見えつる  
 かの曇よかき物れて跡も見え  
 ず。なりにけり跡をも見えせず  
 なり又けり。○中入間

早書  
 待遊  
 ○切遊子

後三融本上  
 出端  
 拍子合ハズ

磯花苔の衣と片敷きて。苔の  
 衣と片敷きて。若根の床よ夜  
 もすから。あほも亭物と見えや  
 きて。夢侍ち頼の旅寝かあ夢  
 侍ち頼の旅寝かあ  
 忘れ年と経し物と。又古よ  
 帰る彼の。満つ塩竈の浦人の。

今宵の月と陸奥のふ子賀の  
浦曲も遠き世よ其の名と跡す  
大臣融の大臣とわ我が事あり  
われ塩竈の浦よ心と妻のせあの  
籬が鳩の松蔭よ明月はあせと浮  
へ月宮殿の白衣の袖も三五夜  
中の新月の色千重あふや雪

と思らす雲の袖 地 ぶすや桂の  
板々よ 上地 志と花と。教らす粧ひ  
いもも 上地 名よ立つ白河の波の  
あら面白や曲水の盃浮けたり  
うけたり遊舞の袖 早舞  
あら面白の遊樂や 早舞 とも明月の  
其の中よ 早舞 また初月の宵々よ影

○独吟  
○任舞

も姿も少なきは女中ある謂ある  
らしミテ上明カニれは西岫はへり日の未だ  
迎けれは影の影は隠さるる。たと  
へば月のある夜は星の影まが如  
くあり上地サリ青陽の春の初は  
ミテ中明カニ霞む夕の遠は地雲の色はみか  
づきの影と毎もたたりたり

又水中の遊魚はシテ中釣と疑ふ  
雲上の志鳥はシテ中引の影も影も  
一輪も降らすシテ中水も昇らす  
鳥は池邊の樹は宿シテ中魚はシテ中  
下の波は伏す地空くとも飽か  
秋の夜の鳥も啼き地鈴も  
聞えてシテ中月も早地上影傾きて切け

虫

山

芳ガの雲クモとなり雨アメとある。此コノの光ヒケ陰カゲに誘ユルわれて月ツキの都ミヤコに入イり終ハる。粧シヨウあら名跡ナセツ惜シの面影オモかげや名跡ナセツ惜シの面影オモかげ。

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

大正拾年七月二拾日印刷  
同 年七月二拾五日發行

訂正著作者 廿四世 觀世元滋

發行兼者 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川 堂

京都市神田區錦町一丁目拾番地  
東京市四谷區傳馬町貳丁目

著者權限  
不許

特116

702



終